ほんまにオレはアホやろか

水木しげる

著者――――――――――水木しげる（みずき・しげる）
1924（大正13）年、鳥取県境港市に生まれる。同市の高等小学校を出て大阪にゆき、いろいろな職業につきながら、いろいろな学校を出たり入ったりする。戦争で左手を失う。戦後上京して、魚屋などをしながら、武蔵野美術学校にゆく。2年後に中退して神戸にゆき、紙芝居かきとなる（6年間）。紙芝居がだめになり上京、貸本マンガをかく（8年間）。こんどは貸本マンガがだめになり、雑誌マンガをかく（14年間）。代表作に『ゲゲゲの鬼太郎』『河童の三平』『悪魔くん』などのマンガと、『水木しげるのおばけ学校・12巻』（ポプラ社）などがある。

本書は1978年9月にポプラ社から発表された
同名の本を新書化したものです。

私の生き方文庫16―1

ほんまにオレはアホやろか

2004年11月　第1刷発行

著者――水木しげる（みずき　しげる）

発行者――坂井宏先
編集――堀　信
発行所――株式会社ポプラ社
〒160-8565　東京都新宿区大京町22-1
TEL　03-3357-2212（営業）
03-3357-2305（編集）
03-3357-2211（受注センター）
FAX　03-3359-2359（ご注文）
振替 00140-3-149271
インターネットホームページ
http://www.dai3hensyu.com
印刷所――清流印刷株式会社
製本所――大和製本株式会社

© Sigeru Mizuki 2004 Printed in Japan
N.D.C.914/234 P/18cm　ISBN 4-591-08353-5
落丁・乱丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。
ご面倒でも小社営業部宛ご連絡ください。

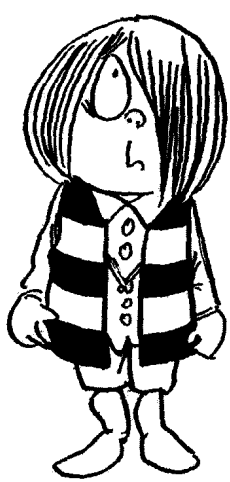
江苏工业学院图书馆
藏书章

水木 しげる

私の生き方文庫16—1

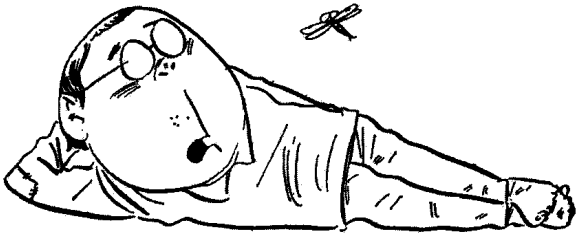
もくじ

「こいつあ、アホとちゃうか」——6
へんな美術学校——17
落ちたのは一人——26
男らしい仕事？——34
靴をはかずに新聞配達——41
ドロボウと流行歌手——49
夜なら頭がさえると、夜間中学に——59
支那通信——63
ぼくは落第兵——72
エプペとなら——96
腕の手術をうけた相模原病院——106
魚の名も知らずに、魚屋開店——117
右手で筆記して、左手でほじくったら——124
マントの下は褌——131
さまざまな間借人——139



東京の大先生——148
パチンコ屋——156
テレビ出現、紙芝居があぶない!!——162
「三十八だ、嫁さんもらえ」——169
毎日が戦い——179
『墓場の鬼太郎』が誕生——184
『鬼太郎夜話』『河童の三平』をかく——192
借金やら、倒産やらで……——199
怪奇ものをやらせてください——205
眠りに弱い男——210
気ままな村人たち——216

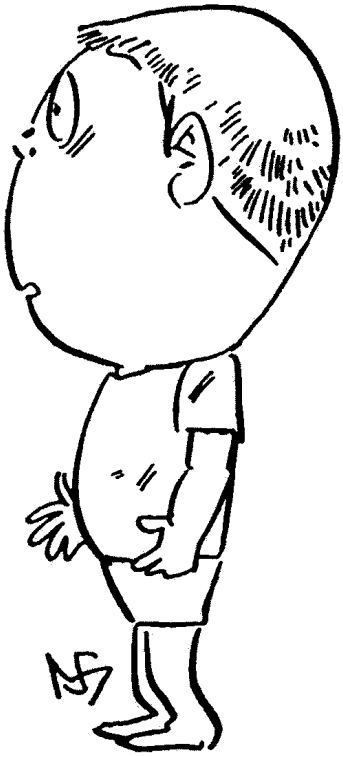
あとがきにかえて——228
文庫版あとがき——231



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

さし絵　水木しげる
表紙写真　八木実枝子
装　幀　水野拓央（パラレルヴィジョン）

ほんまにオレはアホやろか



水木 しげる

「こいつあ、アホとちゃうか」

ぼくは鳥取県の境港市というところで生まれた。

健康でものすごく、よく寝る子どもだった。そこへもってきて、人のいうことをきかない上、舌があつくてしゃべれない。

しゃべれないくせに、自分の思いどおりにくらす、といった子どもだったから、三人兄弟のうち、兄と弟は幼稚園に行ったが、どうしたわけか、ぼくだけは行かされなかった。たぶん、規格にはまらない子だし、朝寝ぼうだからと、両親が遠慮させたのだろうか。ここですでに、ある種の落第がはじまっていたようだ。

小学校は義務教育だから、何の心配もない。学校というものが、すべて小学校みたいであればそれは、それでいいと思う。

小学校時代は、ガキ大将と趣味の生活だった。

ガキ大将というのは、子どもの世界の指導者だ。腕力が強くなければいけないが、それだけではない。子どもの生活である遊びの方もうまくとりしきらなければ落第する。適当に武力を誇示しなければいけないが、弱い者いじめをするとクーデターによって失脚して

しまう。なかなかむずかしいものなのである。
幸い、ぼくはメンコや水泳が得意だった。海が近かったので、子分の泳ぎを指導したり、寒い間はメンコ合戦を主催したりした。
それに、弱い者いじめもきらいだった。強い者とか上級生とケンカするのは好きだった。それは、ボクシングでいうと一つ上の級で争うことになるからだ。女の子とは、昔は、遊びがちがっていたのである。そうでなくても、ぼくは女の子は好きだからいじめなかった。
ガキ大将の仕事でいそがしかったから、勉強はやるひまがなかった。それに、奇妙な愛きょうも手つだって先生は、あれは特別だからと、おかしなソンケイまでされるようになった。それで、ますます勉強しなくなった。
学校の勉強はしなかったが、自分の好きなことに熱中した。それが、ここにいう趣味である。
昆虫や貝殻や海草などをやたらとあつめて、押入れの中にためこんだり、スケッチしたりして、その世界にいりびたることをたのしんだ。
メンコのふだに工夫して強いふだにしたり、凧なんかも自分でつくった。

二十日ねずみや山羊などを飼ったこともある。
それから、妖怪や伝説の研究。
これは、近所に伝説や宗教にくわしいばあさんがいて、いろいろ教えてくれたのだ。
今から数十年前には、その地方の町や村にもこんなばあさんが一人や二人はいて、不気味な、それでいて味わいのある話をしてくれたものなのである。
ばあさんは、山へつれていってくれれば山の妖怪、海へつれていってくれれば海の妖怪、というように、あたりに満ち満ちている自然の精霊というものについて話してくれた。
ばあさんは、七夕になればその由来、とんどさんという正月のしめなわを焼く行事になればそのいわれ、そういったものをぼくに教えてくれた。
ぼくは、ばあさんの話を聞きながら、祖先の霊が自分の心の中に入ってくるような感じがしていた。
とくにそんな気分をもりあげてくれるのが、お盆の行事だった。
祖先の霊が帰ってくるというので、町中が霊をむかえるしたくをする。
ぼくはその独特のフンイキが好きだった。
海に、野さいをのせたワラ船やら灯籠やらを流すと、ゆらゆらゆれながら進んで行く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

それを見ていると、海のはるかむこうに、こういうものが流れつく場所があるような気がしてくるのだ。

ばあさんは、それが十万億土という極楽のような所で、霊が住んでいる所だという。

そういわれると、目で見たわけではなくとも、なんとなくそんな気がしてくるのだった。

また、町のあちこちにある神社や祠もそうだった。

ぼくは、神社や祠の前を通りかかるたびに、こんなふうに祀ってあるかぎりは、何もないわけはないと思い、社に破れ目でもあれば中をのぞきこんだりしていた。

ある日、町に大きな火事があった。たくさんの家とともに、神社も焼けた。

ぼくは、燃える神社から何か逃げだしたのではないかと考えた。神社の焼け跡にたって考えこんでいると、同級生が、

「火事の時なあ、神主さんが御社の中から大きな石を持って逃げんさったぞ」

という。

「すると、御神体は石だったんか」

と、ぼくは思った。しかし、石は石でもただの石ではないだろう。きっと、何か不可思議な作用で、霊の世界につながるような石なのだろう。こんなふうに、あとで考えた。

こうして、小学校の六年生まで来てしまった。
ガキ大将としては、町内一の遠泳をほこり、あいつぐ戦争ごっこやメンコ合戦でも勝利をおさめ、子分までできていた。
趣味の方では、あらゆるコレクションがふえ、妖怪や伝説にもくわしくなっていた。
しかし、六年生になると、受験という難関が待っていたのだ。
戦前は、小学校までが義務教育で、その上は、無試験の小学校高等科を二年間やって職業につくコースと、入試を受けて中学校へ進む進学コースとにわかれていた。
ぼくの近所は、いなかなのにわりと進学熱がさかんで、クラスの半分近くが中学へ行くコースを選んだ。ぼくも、成績のことはまったく気にせず、すっかり中学へ行くつもりでいた。
ところが、母が先生に相談すると、
「受験してもダメでしょう」
と、あっさりいわれた。
母は驚いたがこれはむりもないことだった。なにしろかんじんの算数がぜんぜんできな

かった。

家で勉強しなかったのはもちろんのことだが、学校でだって勉強はしない。遅刻にしてからひどかった。とくに冬は寒いので、九時ごろまで寝ている。

兄や弟は、とっくに起きて、朝食もまともに食わずに学校にすっとんで行くのだが、ぼくはゆうゆうと起きだして、兄や弟が食いそびれたぶんまでも全部たいらげてから登校するのだ。人と体内時計（生物時計）ともいうべきものがちがうのだ。

これでは、一時間目がまにあうはずがない。一時間目は算数の授業なのだが、それが終わってから登校していたんじゃあ、いい成績のわけがない。算数の試験はいつも0点だった。そのかわり、よく太った元気な子どもで、毎日が楽しかった。

もちろん、そうなるまでには、母や先生にもずいぶんしかられたが、あまりにもいうことをきかなかったからしかりくたびれたのだろうか、そのうちに大目（おおめ）にみてくれるようになったわけだ。

遅刻をしても、先生もおこらず、生徒もふりむきさえしない。ぼく以外の生徒が遅刻すれば、先生はおこり、生徒はケーベツのまなざしで見つめたものだが。もっとも、ぼくはそうされたってこたえなかった。それまでにはうんとなぐられていたので、面（つら）の皮もずい

ぶんあつくなっていたから。こうして、ぼくは治外法権的存在になっていたのだ。
だが、ぼくにしてみれば、これは、楽しく生活をするわが道を行く生き方なのだった。いや、これは生き方というよりも、タチだったのかもしれない。
大地の神々がぼくを守ってくれているというようなことを本能的に考えていたのだ。この地上に生まれてきたからには、その地上の神々がぼくを生かしてくれるにちがいない、大地の神々にそむくようなことをせずにいれば、あくせくする必要はない、他の人の目から見れば不真面目でも、ぼくの生き方こそ真面目なのだ、こう考えていた。
これは、どうやら、趣味で知った虫や妖怪の生き方に影響されたもののようだった。
だが、ぼくの生き方と、中学の試験は、あいいれないもののようだった。
とにかく、中学の試験は受けてもダメだということになった。算数が0点ではどうすることもできないのだ（当時の試験科目は、算数と国語だった）。
それで、ぼくは、小学校高等科の方へ進んだ。
すなわち、ここでは戦わずして落ちたわけだ。
高等科の二年間も、あいかわらず、ガキ大将と趣味ですごした。
やがて、高等科二年を終了した。ここから上級学校へ行けないこともない。しかし、や

はり試験はある。高等科の間に勉強でもしていればともかく、ガキ大将と趣味にあけくれていたので、依然として算数がダメ。とうとう就職することとなった。

大阪の印刷屋につとめることにきまった。

当時は、石版印刷というのがさかんで、その石版の字や絵を修正する仕事だった。

さて、大阪まで来て、住みこみで仕事を始めると、それまでとは勝手がちがう。南京虫にかみつかれてろくろく寝られないところへもってきて、朝早く起こされる。寝るのが大好きなぼくは、慢性の睡眠不足になり頭がぼーっとなってしまった。ねそべって新聞を読んでいる主人の頭を座ブトンとまちがえてふみつけるという大失策をやらかして、たちまちクビになってしまった。

運よく、またべつの印刷所に就職できたものの、ここもうまくいかなかった。

仕事は使いばしりばかりで、自転車で印刷機具をはこぶのだった。これ自体は、ぼくにはよかった。自転車であちこち走りまわれば、いろんな所が見られるので楽しいからだ。しかし、つい、楽しさに熱中してしまう。仕事の途中で、太鼓屋を見つけ、太鼓をつくるようすがおもしろいので、一日中見ていたりするものだから、

「こいつあ、アホとちゃうか」

ということになって、これまた、たちまちクビ。

あてもなく、ぶらぶらしていたある日、古ぼけた店でナシを売っているのを見つけた。食い物はまず食ってから考えるというタチが発揮されて、すぐに買って食うと、これがくさっていたとみえて、体調がわるくなった。医者は黄疸だという。仕事もないし、病気だし、ともかく境港へ帰った。病気はまもなくなおったが、学校へは進めない、勤めも満足にできない、というぼくの処置に、両親はこまってしまった。

しかし、ぼく自身は、わりかし平気だった。なにしろ、つきあっているものが、虫の世界とか、自然といったものだったから、ヒマができたとばかり、絵ばかりかいていて、とてもたのしかった。

「野の鳥をみよ……」じゃないが、海のかもめも、山の虫たちも、たのしそうにくらしていた。彼らには、落第なんていう、そんな小さい言葉はないのだ。この大地の自然の神々の意志にしたがって、生きれば、そんなに住みにくいもんじゃない。

ぼくは、家の横の川の、ベンケイガニの動作を朝からみていた。コケみたいなものを食べたり、話をしたり、遠出したりして、一日中くらしているのだ。両親は、そういうサマをみて、「この子、ほんまにアホとちゃうかナァ」という目つきでみていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo